
碧色涙《あおいろなみだ》

リュウカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧色涙あおいろなみだ

【Zコード】

N3924M

【作者名】

リュウカ

【あらすじ】

一人の旅人の、足跡を描いた物語。

「ねえ、どこへ向かってるの？」

それは、いつも通りに答えました。茶色い布をぐるぐる体に巻きつけた女の子は「すてき！」ととても嬉しそうに、楽しそうに微笑み、そして最後に、頬を上気させながら言いました。

「頑張つてね。青い旅人さんに、幸運を！」

大きめの右手と、小さな両手で握手します。幸運のおまじないです。

そうしてそれは、また歩き始めます。小さな女の子は、その少し大きな背中をしばらくの間見つめ、小さくなつてから家へと帰つて行きました。

それはずっと歩いています

それはずっと探しています

それは碧い髪に、碧い服

田と肌だけが、真つ白でした

砂漠を越えたそれは、とある街に着きました。そこでは、浅黒い肌をした人々が田影に身を寄せ合つて、ただそこにはいます。

この道を進むとそこには広場。広場の中心には、砂まみれの乾いた噴水がありました。そこは、市場として使えそうなほど広く作られています。

風が一陣、たくさんの砂をはらみながら通ります。乾ききった風は、ただ熱いだけのものでした。

風が通り過ぎてから、それは服についたたくさんの砂を払い落としました。白っぽくなつていた服は、元の碧さを取り戻します。

その近くにいた、田影に座り込んでいる浅黒い肌の男は、それが服の砂を払う音でようやくそれに気付きました。赤や黄色の鮮や

かな、しかし砂にまみれ、くたびれてしまっている服を着た男が、それに話しかけました。

「ああ、旅人さんか…こんな、何もない所によつてや。一体、何のようだい？」

それは、いつも通りに答えました。男はそれを聞いてせき込むようく水を持つてないか聞き、それがないと答えると、どこか遠くを見つめながら言いました。

「そうか…この先には、何もないよ。昔は”ウミ”だつたらしいが、今じゃあただの墓場さ。」

浅黒い肌の、元は鮮やかだったるう服を身につけた男は、太陽がずっと照り続け、その上雨がまったく降らなかつたので、その”ウミ”は干上がつてしまつたのだと疲れた顔で教えてくれました。そのせいで、水を求めて隣国と”戦争”になつてしまつたのだと言つことも。

「水はもつほどんど残つてない。近くの街が少しは分けてくれるが…明日にも底をつきそうだ。ここから離れる気力さえ、とうの昔になくしたよ。今、こゝして話せるのが不思議なくらいさ…」

食べ物も残つてないから、後は本当に飢えて死ぬだけだとかすかに笑い、何かぽつりとつぶやいて、男はうつろな瞳でもう一言も喋りませんでした。

光のない瞳をもつた人々がただそこにあるだけの街は、廃墟も同然でした。

違うのは、人形がそこら辺中に、壊れもせず置いてあることだけ。そしてそれは走り出しました。さつきまで人間だった男が、”墓場”と呼んだ方へ。砂が舞い、もやになるのも気にせず、周りの人形にそれがかかることも気にせず、高鳴る動悸とカラッポな心を持つて。

それはずっと歩いていました
それはずっと探していました

”生まれた場所に戻らなければ”
世界の声を聞きながら

そこは戦場になりました。今はただの死体置き場です。”墓場”とは、到底呼べそうにありませんでした。死体はただ、転がっています。

広く、黒い乾いた地には、さつき会った人形達が着ていた服と同じ服を、砂で真っ白に染めた死体と、茶色の、やはり砂で真っ白に染まつた布をぐるぐる体に巻き付けた死体とが、同じ様にたくさんちりばめられていました。

それらは、乾いた風にさらされて、ミイラのようになつていました。

それは、胸がさらに高鳴るのを感じました。

同時に、心がさらにカラッポになつていいくのを感じました。・・・

男の話を聞いた時

よりもさらに、です。

ひたひた、ひたひたと溢れてくる想いが、心をカラッポにしていきます。

そこは、それが望んでいたものでした。

でもそこは、それが望んでいた姿ではありませんでした。

茶に赤が染み込んで、黒くなつた大地。

たくさんの、死体。そして

乾いた空気。

”戦争には勝ちも負けもしなかつたけど…負けた方が、楽だつたかもなあ…”

微かで、風にさらわれてしまいそうだった声は、なぜかそれの耳へしつかりと届き、心につきわたつていました。

元々、青色のたくさんの中がここにはありました。肌にはりついて、少しべつとりとした潮風が吹き、あたりには磯の香りが漂います。魚市場のにぎわう場所、噴水のある街、海の街、フロンベルジー。

それは、あの廃墟がその名を持つていたことは知りませんでしたが、そうであったことは容易に想像できました。

そうして、ようやく、

それは、自分の罪の重さを知りました。

それを思い出したそれは、何かにつき動かされるかのようにゆっくりと、あの廃墟にあつた人形達と同じうつろな瞳で、操り人形のように黒い大地の中心へ歩いて行きました。

それはただ見たかったのです

それはただ知りたかったのです

自分の上を横切っていく

木や鉄の塊、その上で動く人形達を

黒い大地の中心についたそれは、糸が切れたようにそこへ座り込みました。

心には何もなくて、動悸はこれ以上ないほど早くて。

でも、糸が切れた瞬間。

動悸は收まり、かわりに心から何かよく分からぬものが溢れ出てきました。

どこからともなく津波のように溢れてくるそれは、その心には到底收まりきれる量ではなく、やがて溢れ出します。

收まりきれなかつた分は、その目から溢れ出します。その、少し塩っぽい味のする水を、人は”涙”と呼びました。

それは、どうして目からそれが流れているのかを考えもせずに、座り込んだままただ流れるに任せしていました。まばたきすらも、しません。

そうしていつの間にか、その姿はどこにもありませんでした。
その場に服だけを残して。まるで、溶けてなくなってしまったかの
ように。

かわりにそこには、たくさんの水がありました。元あつた海の水
をそのまま持つてきましたような、溢れるほどたくさんの水。

昔のような青い風景。違うのは、

たくさん水の底に沈んだたくさんの死体、黒く染まつた大地。

そして、

海水とは違つて、少しだけじょっぱい… そつ、
涙のような味だけでした。

それは、後に『涙の海』『悲しみの水』と呼ばれる巨大な水たま
りを残して、どこかへ消えていきました。

それは色々なことを知りました
同時にたくさんの悲しみを生みました
やがて、それを知ったそれは
もとの自分に戻りました

”どこに向かっているの？”
”水平線を探している”
”すてき！”

水平線を探していた碧い旅人は、
水平線になりました。

(後書き)

ずいぶん前にかいたやつです。

サイトのどこかにおいてあるのを再利用。いつか書き直したいかも。文章がまだまだつたない。今見るとつくづくそういう思います、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3924m/>

碧色涙《あおいろなみだ》

2011年1月27日06時15分発行